



外報摘要

第拾四回



114
A 772
4



支那
外報摘要第十四回目次
於ケル英露

其一、ロバートソン氏ノ所論

其二、ノルマン氏ノ所論

其三、米國新聞ノ評論

一、アルメニヤ問題ニ對スル國會報告書及アノトーノ議會ニ於ケル演說

一、日布事件ト米國軍艦派遣

以上

明治三十年五月十七日脱稿

大正十一年四月
隈侯爵邸寄贈

支那ニ於ケル英露

其一、ロバートソン氏ノ所論

エム、ウイリヤム、ロバートソンハ、「ウエストミンスター」評論ニ於テ
露清條約ヨリ生スル支那ニ於ケル英露ノ地位ト題シ論シ
テ曰ク

「露清兩國間ノ關係ハ該條約ヲ以テ最終ノモノトスヘキカ否ヤ
ハ暫ク措クモ、該條約ノ結果曩ニ露國ノ發表セシ露清鉄
道布告ニ見ハ、目前渠カ勢權ノ支那ニ對スル頗ル懼ルヘキモ
ノアルヲ知ルヲ得可シ、蓋シ該鉄道ヤ滿州チ、カルクランチエ
ニ等ヲ中心トシ左右浦塩斯德ヨリ旅順山海関ニ及ヒ更

ニ北京天津ニ達シ、縱横來往交通ノ密着ヲ圖ルノミナラス中
ニ存スル不凍ノ港灣ヲシテ渠ノ使用ニ供セシメ殆ント渠ヲシテ
北方支那全部ノ司命權ヲ掌握セシムルモノナレハナリ、是豈
露國カ其競爭者タル日英ヲ排束シ極東ニ威ヲ振フノ素地
ニアラスシテ何ソヤ、畢竟之レ支那ハ北方全部ニ對シ尚領屬
ノ空名ヲ保ツモ露ニ實權ヲ與ヘシモノトスハスシテ何ソヤ
於茲乎支那帝國對英國政策ノ問題ハ又勃焉トシテ起ラ
サルヘカラス、然レトモ此問題ハ今日ヲ以テ始マリシニアラス、
回想セハ之レ曾テロースベリイ内閣ノ當時業已ニ研究ス可
キ問題タリシナリ、即之ヲ解釋スヘキ第一ノ機會ハ渠日本

ノ朝鮮ヲ冒伏シ進ニテ支那ニ着手セントセシ際ニアリシナリ、而
シテ彼ハ之カ解釋ヲ試ミントセシモ一朝露國ノ聯合拒絶ニ會
フヤ忽如トシテ逡巡シ再ヒ之ヲ口ニセサリキ、嗚呼何故ニ彼ハ蹉
跌ヲ以テ其意思ヲ遂行セサリシカ、日清戰爭ヨリ延テ露清
條約ノ來ル可キハ識者ノ夙ニ知ル所、而モ彼優柔不斷遂ニ
露ヲシテ漁夫ノ利ヲ得セシメヌ、然リト雖モ既往ハ逐ノヘカラ
ス敬言シムヘキハ將來ニアリ、望ムラクハソールスベリイ内閣タルモ
ノ前者ノ轍ヲ覆マス銳意一番速ニ中部及南部支那ニ着
手シ露ヲシテ獨リ狼慾ヲ恣ニセシメサランコトヲ去々レ(1)

其二、ノルマン氏ノ所說

露國ハ條約ノ結果北方支那全部ヲ自家ノ保護下ニ置キシモ
ノト云フ可シ渠ハ該地方ニ於テ任意軍隊ヲ駐屯シ時ニ支那兵
ヲモ徵集スルヲ得ルノミナラス鑛業ヲモ發達セシムルヲ得ヘシ況
ンヤ農業其他ノ殖産事業ヲヤ、而シテ儻シ危雲ノ極東ニ
起ルアラハ渠ハ旅順大連灣等ヲ使用スルヲ得ヘク更ニ又渠ノ
設計セシ露清鐵道ニシテ竣功セハ莫斯科及北京旅順間ノ往返
ハ轉瞬ヲ以テ為スヲ得ン、單リ之レノミナラス渠ハ支那政府ヲシ
テ北京漢江間ノ鐵路附設ヲ約セシメヌ、漢口ハ固是楊子江ノ重
要港ニシテ支那ノ神髓中ニアリ、勿論此鐵路ヤ支那ノ建設ス
ヘキモノナルモカヲ露ニ待タスニハ能ハシ、惟フニ是等ノ鐵道ニシテ功

成ランカ、露國ハ何レノ地方ヨリモ支那ノ首都及咽喉タル要所
ニ軍兵ヲ送ルヲ得ヘク、遂ニ渠ノ意ヲ伺ノ、後ニアラスニハ縱令
歐洲列強ヲ以テ支那ニ臨ムモ得ヘカラサル底ノ勢力ヲ占ムル
ニ至ラン、露國ハ北支那全部ノミナラス支那全軀ヲ掌握セシ
モノト云フ可シ

佛國亦支那政府ニ要求シ漸ク事實ニ至ラントス、則在北京佛
國公使ハ先ニ福州ニ重要ナル一大武庫建設ノ許可ヲ得今又ハ
イラン(Annan-Kangson)ヨリ東京ニ至ルノ鐵道延長ヲ
請求セリ、是レ渠ノ露ニ對スルモノニアラスシテ何ソ

一ハ北部ニ計畫シ他ハ南部ニ計畫ス、顧ミテ英國ノ對清策ヲ見

ハ果シテ何似、依然旧套ヲ脱セシハ帝ニ政權ヲ失フノミナラス其
最大ノ高權ヲモ亡ハシ、見ヨ、清國ニ輸出スル貿易品額ハ無慮三
千計百万弗ニシテ實ニ渠カ全輸入額ノ六割七分ヲ有スルヲ知ラス
英國タルモノ甘ニシテ之ヲモ放棄セントスルカ、今ニ於テ之カ謀ヲ作
サスニハ後ニ悔ユルモ迨ハシ、立テ速ニ、而シテ獲ル所アレ、若シ止
ムナクシハ露ト盟約シ多少力ヲ彼ニ貸スモ俱ニ進ミ以テ目的ヲ
達セサルヘカラス云々⁽¹⁰⁾

其三、米國「ヘラルド」ノ評論

「露清條約ハ英國ノ支那ニ於ケル政商ニ權ヲ沮喪セシメ露ヲ
シテ之ニ代ラシメシモノナリ、晩近英國ハ頻リニ卑怯短見ノ例証ヲ

挙ケ支那官吏ノ無膽ニシテ且理由ナク恐怖ヲ絶叫スルモ、寧ロ
知ラニヤ、渠等ノ虎足ニ躡ラル、ヲ甘ニスルハ却テ狼手ニ扼セ
ラル、ニ優レリト喜ヒツ、アルニヨルヌ、既往數十年間英國ハ支那
ニ於ケル政商ニ權特ニ後者ノ專有者ナリキ、而シ一朝ニシテ之ヲ
失ス、蓋自業自得ノ結果ナラスヤ、則日本ノ窮迫ニ會ヒ渠ノ危
急存亡ニ際シ凌辱ヲ渠ニ與ヘ露ヲシテ策セシメシハ、抑渠カ外交
ノ大失錯タルモノ、反之露國這般ノ成功ハ彼千八百六十年イグ
ナチーツフ將軍成功以來ノ榮功ト云フヲ得ヘシ、而シテ露國ノ
榮功ト共ニ利ヲ得可キハ我合衆國ナリト云ハサルヘカラス、他ナシ
露國ノ談進取ハ單リ彼ノミナラス清國ヲ驅テ諸般ノ事業ノ

勃興ヲ来シ之ニ對スル材料器械等ノ需用ヲ要スヘク尤モ露國ハ自國製造物保護ヲ主トシカヲ盡シテ是等需用ヲ充スニカムヘキモ、今テニシテ是ニ應センハ到底望ムヘキニアラス露國既ニ然リ況ニヤ清國ニ於テヲヤ、然ラハ則渠等ハ農業器具ト云ハス、鐵道材料ト稱セス將電氣器械ト云ハス悉ク他ニ供給ヲ仰カサルヘカラス、世界到ル處是等ヲ供給スル者多シ然レトモ斯種ノ產出額ニ至ツテハ我ヲ以テ第一位トス、是レ渠等ノ我ニ仰ク所以ニシテ又我ノ益スル所以ナリ

人アリ或ハ曰クサイベリヤ鐵道ノ敷設及北京朝廷ニ於ケル英露勢權ノ代謝ハ合衆國ニ頗ル戒心ヲ促サシムルモノアルヘシ、何トナ

レハ露西亞々細亞ハ夙ニ小麥綿石油等ノ產出ニ於テ合衆國ノ競争者ナルニ、加フルニ獨逸統計學者博士バロッド氏ノ報ニヨレハサイベリヤ(トランスバイカル地方含蓋)中既ニ開拓セラレタル田圃無慮八億四千七百万「エーカー」其產出額八百万噸内百七十万噸ハ實ニ歲々ノ輸出ニ係ル而シテ現在ノ農民ニ對比セハ年々百五十「パーセント」ノ割合ヲ以テ増加ストアリ、更ニ之ニ滿州ノ北アムール及烏蘇里地方ノ耕作地七十万「エーカー」ヲ以テセハ是等ノ產出額ニ増加シ彼小麥ノ如キ石油ノ如キ我ヲ凌キ單リ世界ノ代辦者タルモノアレハナリト、然レトモ之レ思ハサルノ甚シキノミ、予輩ハ云ハン生存競争ハ

社會ノ通義競争者アリテ而シテ後國ノ發達進歩アル
ナレ、況ンヤ我ノ足ラサルアレハ之ヲ補フノ便アルヲヤ、又況ニ
ヤ前陳ノ如ク我ヲ益スルモノ多々ナルニ於ケルヲヤト云々(ハ)

摘要新聞雜誌

- (イ) 千八百九十七年四月十二日「支那ガゼット」
- (ロ) 同上二月十五日「レビュイヲフレビュース」
- (ハ) 同上二月二十八日「紐育ヘラルド」

アルメニヤ問題ニ對スル國會報告書イエーローブツク及アノトーノ
議會ニ於ケル演說

アルメニヤ問題ニ對スル佛國外交政策ハ本年二月十六日國會
報告書ヲ以テ發表セラレヌ、今ヤ歐洲ノ形勢ヲ見ハ希土事件
一本件ハ他日詳細ニ報告セシハ列強政治家ノ腦將水ヲ驅テ之ニ
赴カシテ、一時社會ヲ聳動セシ彼アルメニヤ問題ノ如キ、之カ為
メ殆ント忘却セラレタルカ如シト雖モ、土耳其命運ノ死活ヲ定
ムルモノハ豈單リ目下ニ於ケル希土事件ノミナランヤ、アルメニ
ヤ問題ノ如キ實ニ至要ノ原素ナラスヤ佛國政府ノ之ニ関シ

報告書發布ノ事アル寔ニ宜ナリトス

抑諛報告書ナルモハ千八百九十三年四月以降ニ於ケルヲト
マニ帝國ノ狀況ニ筆ヲ起シ改革提出ニ至リテ之ヲ止メ又而
シテ諛問題ヲ解釋スルニ当リ先ツ小亞細亞方面ニ行ハル人
種上ノ軋轢ヲ引キ次クニ君斯坦丁堡駐劄公使カムボン氏
ヨリノ信書ヲ以テセリ、其所謂人種上ノ軋轢トハ土耳其帝
國內幾多ノ種族アリテ是等常ニ相對峙シ争鬪ノ極彼ア
ルメニヤ問題ノ如キモ誘出セシニアラサルナキカト云フニアリシ
又公使ノ信書ハ千八百九十三年四月一日附ヲ以テ我當時ノ
外務大臣ドビル氏ニ宛テ我同僚英國公使ハアルメニヤ人ニ

對シ最モ公平ナル處理ヲ土政府ニ要求スヘキノ訓令ヲ宣示ケ
シトノ報告ニ始マリ其後通信相接キ何レモ諛問題ヲ解
スル頗ル妥當ナリキ、就中千八百九十四年二月廿日公使ヨリ
カシミルペリール氏ニ致セシ通信ハ其詳ヲ悉シテ餘蘊ナキ
ハ予輩(タイムス記者)ノ感嘆措ク能ハサルモノアリ、其書ニ曰
ク

二年以前ノ事ナリキ土耳其政府ノ一顯官ハ予ニ告ケラク
アルメニヤ問題ハ惹起セサルヘシ然レトモ吾人ニシテ之ヲ惹
起セントセンカ其成立ヲ見ル固ヨリ易々ノ業ノミト、當時
予ハ之ヲ以テ單ニ戲談ニ過キストシ敢テ意ニ介セサリシニ、

圖ラサリキ渠カ戲言ハ今日其實ヲ示スニ至レリ、由是觀之アルメニヤ及附近ノ邦土ハ二年以前ニアツテ業已ニ土耳其政府ノ演セントスル最モ嫌フヘク最モ忌ムヘキ悲劇ノ目的場タラサリシニアラサルカ嗚呼土耳其ハ亞細亞方面ニ於ケル東方問題ノ再開者ニアラスニテ何ソヤ

閣下知ラル、如クアルメニヤハ軍事上ニ於ケルノミナラス又政治上ニ於ケル最大重要地ナルヲ以テ、將來ノ安固ヲ保セン為メ曩ニ伯林條約ハ其第六十一條ヲ以テ諛地現在ノ耶蘇教徒ニ歐洲的利益ヲ與ヘ、更ニ千八百七十八年ノサイプラス條約ハアルメニヤ人ニ對シ分離配利ヲ以テセリ、當時アルメニヤ國民

ハ一般ノ思想幼稚ニシテ土耳其政府ニ向ヒ警告醒スルノ感念アルニアラス況ニヤ獨立ノ精神ヲ、唯歐洲ニ七命ニ歐洲的教育ニ沐浴セシ教者ニアツテハ是等ノ感念及精神ヲ包持セシモ、而モ是尚一ノ夢想ニ過キサリシナリ、然リト雖モ頑強ニシテ及省力ニ乏シキ土耳其ノ惰眠ハ漸クア人ヲシテ政府ニ對スル好意ヲ沮喪セシメ轉シテ嫌惡トナリ遂ニ抵抗ヲ喚起スルニ至レリ、蓋シ土耳其政府ノ施政ヤ正義ヲ埋没シ道理ヲ侮蔑シ剣ハ生命財産ノ安固ヲ無視スルモノアレハナリ、而シテ此事ヤ渠ノ帝國ヲ通シテ端ヨリ端ニ追ヒ希臘人ト云ハスアルバニヤ人ト云ハス又アラフ人ト稱セス等シク此苛制ニ沈溺セシモ、特ニ歐洲列國ノ注意

ヲ促カシ改善ノ必要ヲ認メシマシハ人ニ對スルモノナリシ、先是
歐洲列國カ不平ニ胚胎セシ人ノ運動ヲ耳ニセシハ殆ント千八
百八十五年ノ頃ニシテ、以還渠等ハ佛英奧及亞米利加諸國
ニ散在シ渠等ノ國民的(公平政治ノ意)ニ舉措ニ向テ同情
ヲ呼ビ或ハ國民委員ナルモノヲ組織シ、或ハ英佛二語ヲ以テ
機關新聞ヲ發行シ、口ヲ極メ筆ヲ磨シテ土耳其政府ノ虐政
ヲ告白シ伯林條約違反ヲ痛撃セリ、就中ア人教會ナルモノハ
率先我ニ向ヒ同情ヲ需メ我義俠ニ待ツモノアルカ如ク演說
宴會ノ類到ル所ニ行ハレ熱心銳意助ヲ藉リテ其目的ヲ貫
徹セントカメリ、故ニ歐洲列國ノアルメニヤニ注目セシモノ、中

其因縁ヨリ推サハ我佛國ヲ以テ第一トセサルヘカラス、斯クシ
テ渠等ノ誠意ハ漸ク我國民ヲ傾動セシニ加フルニ渠等ハ更
ニ一大援助ヲ得タリ即グラッドストーン氏ノ内閣ハ渠等ノ舉措
ヲ必當トシ之カ補助ヲ約セシテ是レナリ、於茲乎渠等又立
脚地ヲ倫敦ニ設ケ熾ニ國民ノ同情ヲ勸誘セリ、外ニ於ケル
形勢カ既ニ以上ノ如シ人ヲヤ内ニ於ケル人民ヲシテ愛國及自由ノ
思想ヲ翫味セシメサルヘカラス、即ケ渠等委員ハ轉シテ之カ鼓
舞ニ努メ其結果日ヲ追ッテ是等ノ思想全列ニ滿ケ渠等
各自ヲ奉ケ目的貫徹ノ難ナラサルヲ看破スルニ至ラシメシ
土耳其政府ハ不穩ノ狀益進ムヲ見之ヲ鎮壓セントセリ、然レ

トモ渠ハ其方針ヲ誤マリキ、他ナシ渠ハ渠等ヲ遇スルニ依然
奴隸ヲ以テシ徒ラニ威嚇権力之ニ加ヘ名クルニ謀叛者若クハ
革命者ヲ以テシ以テ鎮定セントシケレハナリ、昨ノ如クナラサル
今ノア人豈斯ノ如キ暴威ニ畏懼シ其行為ヲ左右スヘケンヤ、
偶是シ渠等ノ好刺激劑トナリシノミ、而モ頑迷無智ノ渠ハ
毫モ憚ルナク殘忍ヲ恣ニシ遂ニ予カ客年報セシセサリア及マル
ミバンノ變併ニ捕縛事件(千八百九十三年一月起リシモノ)アリ
ラ審問(同年五月六日全上)五名ノ死刑執行事件(同年七月
全上)ヲ生シアルメニヤヲシテ恐懼、戰慄、暗殺強姦捕獲
ノ慘境ト化セシメシヨリ、近テエズガット事件ヲ起シ更ニ五百ノ

生靈ヲシテ犠供タラシメ、愈暴威ヲ逞フシ民人ヲ困蹙ス
ル甚シク今ヤ其範圍アレホヨリトリビゾンド、アンガラヨリエル
ゼルム地方ニ及ヒ最早列國ハ勢ヒ干涉ノ止ムヘカラサルニ至
リヌ
以上ハ是レ千八百九十四年ノ初期ニ於ケルアルメニヤ問題ノ真
想ナリ、惟フニ列國之ニ干涉スルモ奈何ニセハ能ク之ヲ溶解
シ得ヘキカ、アルメニヤノ獨立米、之レ望ムテ容易ニ得ヘキノ
業ニアラス、況ニヤアルメニヤハ彼バルガリヤ及希臘ノ如ク地形
自ラ獨立ノ体ヲ具ッルモノニアラス民人ハ土耳其帝國ノ四隅
ニ散在シ其本部ハ寧口種々ノ混合種族ヲ以テ成リ且邦土ノ

土耳其波斯及露國間ニ在スルモノアリテ、善シ假リニ獨立
セシムトスルモ新國ノ境界ヲ劃然タラシムルハ頗ル至難タルモノ
アルニ於テヲヤ、特ニ況ニヤ、ア人中半自治制度ニ満足セントス
ルモノ未タ全ク其跡ヲ絶ケシニアラサルヲヤ、左レハアルメニヤ改
革問題ハ何レニ始マリ何レニ終ルヘキカ、更ニ亦本國政府ハ
改新ノ約アルモ渠土耳其政府ニ信ヲ措ク能ハサルハ我人共
ニ夙ニ悟ル所、而シテ改新ハ細大漏サス國政ヲ舉テ為レ、ル
カラス、若シ夫レ十年前ナリセハ当年ノ改革條項ヲ以テ尚
ア人ノ感謝ヲ稟ケシナランモ今ニ於テハ到底彼ヲ以テ是ヲ得
ヘカラサルノミナラス恐ラクハ首肯ダニ得能ハサラン、難哉、アル

メニヤ問題ノ解剖ヤ

然ラハ則アルメニヤ問題ハ徹頭徹尾溶解ノ見込ナキカ、政府ノ
苛虐ハ旧ニ異ナラス民人ノ不平痛苦亦依然タリ、歐洲新
聞ハ擾亂ノ止マサルヲ長嘆シ耶蘇教國ノ公論ハ土耳其
蹙迫ヲ訴フル急ニ、其声ヤ英國ニ止マラス北米合衆國
ニ波及シ、悉ク伯林條約違反ヨリ干涉ヲ絶叫スルモ干涉
ノ餘明日之カ目的ヲ達シ得ヘキ乎、將亦向後數年ヲ費ス
ヘキカ、土耳其政府ハ曰ク此有様ヤ尚永ク繼續ス可シト、噫
誰レカ之カ處理ノ一日モ速ナランヲ希ハサル者ソユ々
而シテ渠カムボンハ之ヲ以テ佛國政府ノ干涉ヲ促シ政府ノ

意ヲ諒シテ或ハ土帝ヲ忠告シ或ハ土政府ニ苦諫シ傍ラ英
露公使ト協議シ以テ改革ヲ迫レリ、而シテ又アノト一八固
ヨリ派ホノ意見ニ同意シ唯千八百九十四年十二月派ニ宛土
耳其政府ニ改革ヲ強ユルハ良シ然レトモ輕率談政府ヲシテ徒
ニ其品位ヲ墮ス如キ底ノ改革ヲ強ユル勿レ亦改革ニ就キ列強
間ノ主導者タル勿レト訓令セシモ、派ヲ信スル頗ル厚ク一切ノ
處理ヲ以テ之ニ委シ或ハ派ヲシテ當時談問題ニ對シ卓越
シテ執心ナリシソールスベリ、卿ト協議セシメ、或ハロバノツフ公ト
交渉セシメシ如キ、或ハ又アノトノカ土耳其公使ト會見スルニ
際ニ派ノ注意ニ鑑ミ吾人ノ提出セシ改革案ニシテ貴政府ノ

實行スルナクハ我ハ速ニ我公使ヲ召喚スルノミナラス列強或ハ
和平ノ為ニ兵力ニ訴フルモ知ルヘカラスト云ヒシ如キ歴々トシテ
信任ノ証タルモノ尠ナカラス、肖來派 カムボンハ百方經營之
カ目的貫徹ニ致タタルモ如何セン土政府ノ為スナキト動モス
レハ列強間互ニ衝突スルノ患(例ハ英國提議ヲ露國ノ排除
セシ如キ)アリテ事ノ功ヲ奏スル困難ナルモノアルヨリ、派ハ先ツ
列強ノ熟議ヲ整フルヲ感シ政府亦之ヲ賛シ今ヤ着々之
ニ向テ歩ヲ進メツ、アリヌ
右ハ之レ報告書所載ノ梗概ニシテ之ニ對シ佛國新聞ノ
意向如何ト見ハ

「リバー」ハ談書ノ發表ヲ賞賛シ佛國外交ノ駁々タルモ
ノアルヲ快トシ特ニカムボンノ伎倆ヲ謳歌シ更ニ仏露同盟
ノ鞏固ヲ勸告シ、若シ之ニシテ一致悽同シ談問題ヲ處理
セハ單リ東方ニ於ケル即蘇教徒ノ安寧ヲ保スルノミナラス
世界ノ幸福ナリト論シ

「デバハアノトリ」カ單獨行爲ヲ非トセシハ理ニシテ又土耳其帝
國ノ品位ヲモ保タシマニトスルハ良シト雖モ、而モ後者ニ流ル
、タク爲メニ在苒機會ヲ失スル如キニ至ツテハ予輩ノ與ミ
セサル所ナリト説ケリ

予輩(タイムス記者)ハ以上ヲ以テアルメニヤ問題ニ對スル佛國

政策ヲ窺知ミ得ルノミナラス去ル二月廿一日佛國議會ニ於ケ
ル「アノトリ」ノ演説ハ更ニ之ヲ闡明セシムルモノアリ曰ク

「人虐殺問題ハ真ニ東方問題ヲ再新セシモノナリ、惟フニ談
問題ニ對シ列強ノ採ルヘキ方針ハ二途ニ出テス即強硬策及
柔軟策是レナリ、前者ノ難クシテ却テ利少キハ後者ノ易
ニシテ寧ロ害多カラサルニ如カシ、而モ或政客等ハ我ノ前者
ニ出テサルヲ攻撃手ス、思ハサルノ甚シキモノナラスヤ、歐洲列強
ノ举措積極的ニ出テサルハ之カ爲メノミ、請フ見ヨ、英國ハ
及對黨ノ氣焰熾ニシ土帝ノ行爲ヲ激罵シ速ニ艦隊ヲ
派シテ渠ヲ處分セヨト逼迫日モ亦足ラサルニ政府ハ之ヲ為

サ、ルニアラスヤ、他人ノ不適當ト考フルモノヲ為サ、ルニヨリテ
我外交ハ振ハスト云フカ、將渠ノ非行ヲ看過ストスルカ、我新
内閣ハ九十六年五月成立以來刻々トシテ英露ト共ニ之カ處
理ヲ計畫シ我ハ既ニ牢獄ノ開放、列人族長ノ再設、耶蘇
教太守ノ任命等幾多ノ案ヲ具シテ列強ニ提出セリ、而モ尚
ミルランド氏ノ如キ之ニ甘ニセス直ニダーダネルスヲ衝キ宮
殿ニ侵入スヘシト云ヘリ、列強悉ク樽俎ノ間ニ和平ヲ致サント
為スノ今日、何人カ得テ一身ヲ以テ危難ニ當リ身ヲ危
スルノミナラス怨ヲ列強ニ買フ如キ冒險ヲ行ハントスル者
ソ、英國ノ海軍ヲ以テシテ進マサル又此理外ニ出テジ、左レ

ハ今日諛問題ヲ干戈ニ血ヲスレテ收メニトスルハ列強符節
ヲ合スカ如ク我政策亦茲ニ在リ、尚人ニシテ我外交ハ活動
セスト云ハニカマ予ハ帝放任セニノミ云々

参照新聞

二月十七日、十八日、二十三日、三月一日、三日、六日、夕
イムスレ新聞

日布事件ト米國軍艦派遣

一方ニ「日本カ布哇ノ條約違背ヨリ生セシ葛藤ニ就キ該地在番國民ノ生命財産ヲ保護セン為メ軍艦浪速ヲ派遣セシハ頗ル肯綮ヲ得タルモノナリト」ニヨリ「ヨークヘラルド」ノ公論アルニ、(1) 他方ニ桑港「クロニクル」ノ暴論アリ後者ノ説固ヨリ則ルヘキニアラスト雖モ參考ノ為メ試ニ譯出セハ要左ノ如シ

「曰ク我合衆國巡洋艦フヒラデルフヒヤハ急行ホノル、ニ向ヒ紮锚スヘキノ命ヲ稟ケリ是畢竟晚近日本國民ノ布哇ニ於ケル暴横跋扈甚ミク這回兩者ノ

間ニ葛藤ヲ生シ我米國民ノ生命財産ヲ危フスルモノ
アルヨリ之カ保護トシテ派遣セラル、ナラン、予輩ハ政
府ノ措置茲ニ出テシヲ賛スルト共ニ渠驕慢不遜ノ
日本人ヲシテ我ヲ見ルニ孱弱為スナキ支那人ヲ以テ
セシムルナカラニヲ希望セサルヲ得ス、聞クカ如クハ
軍艦乗込ノ船員等皆此ノ行ヲ壯トシ恰モ風雲ヲ莅ン
テ髀肉ヲ撫スルノ慨アリト蓋シ然ラン、而シテ予輩更ニ
親シク一士官ノ語ルヲ聞ク曰ク、這回ノ葛藤ハ固是日
本人ト土人トノ間ニ胚胎一記者曰ク既ニ事實ヲ誤レリ
セシナランモ而モ是レ新生面ヲ開クノ端緒ナラストセン、

恐ラクハ渠日本人ノ共和制ニ對シテ擾亂ヲ惹起スルノ
導火線タラストセン、果シテ然ラハ我同胞ノ生命財産
危キヤ言ヲ俟タス、予輩ハ速ニ任ニ赴キ職ヲ完フセサル
ヘカラス、予輩ハ切ニ望ム激烈ナル爭鬭ノホノルハニ生
センヲ、聞ク我新大統領マツキンレー氏ハ布哇ニ對
シクリブランド氏ノ政策ニ全然反對ナリト抑快ナ
ラス哉、惟フニ近年日本人問題ハ我合衆國政府ヲ
刺激スル甚シク布哇亦然ラン、願クハ予輩等此行
六ヶ月間ホノル、ニ滞在スルヲ、儻夫レ再カラニカ度
幾クハ全島ヲ峯ケテ我國旗ノ翩翻タルヲ見ルヲ得ン、

我合衆國政府及國民ハ奈何ニスルモ布哇ヲシテ日本ノ
顛使ニ措クヲ看過スルモノニアラサルヘシ、予輩ハ一日モ
早ク渠ニ折衝シ渠ヲシテ膺懲ノ苦ヲ嘗メシムルヲ樂ムノ
ミト^レ云々^レ

摘要新聞

- (イ) 四月十二日「紐育ヘラルド」
- (ロ) 四月二日「桑港クロニクル」

